〈彙　報〉

平成元年度国文学科活動報告

芸能鑑賞

日　時　平成元年六月一九日(月)
　午前十時三十分から(二年生)
　午後二時から(一年生)
場　所　国立文楽劇場
参加者　一年生二〇〇名、二年生一九五名、専任教員七名、助手二名の計四〇四名。
演　目　文楽
　午前の部
　映画　「文楽の魅力」
　解説　義太節について・人形の遣い方
　「新版歌祭文」
　　座摩社の段・野崎村の段
　午後の部
　解説　文楽について
　「夏祭浪花鑑」
　　釣船三婦内の段・長町裏の段

平成元年度の芸能鑑賞は、第六回文楽鑑賞教室の「新版歌祭文」と「夏祭浪花鑑」とを観た。両作とも大阪が舞台になっており、学生たちにとっては、親しみやすい作品であったと思われる。

ところで古典芸能である文楽を、現代の若者に観させることは、正直いって辛い時がある。それは、解説がまずかったり、人形の動きが少ない、まるでお通夜みたいな舞台になっている時などである。そんな時は、ひそかに心の中で、文楽はこんな物ではない、もっと面白いところもある、と思ってしまう。

浄瑠璃は愁いを主題とする芸能である、という考えがまだ主流を占めているのか、なぜか物悲しい作品が多い。文楽の観客の増加が、そろそろ頭打ちになっていることは、定期公演の夜の部に足を運べばわかる。素浄瑠璃を聞き、自らも楽しみながら語った瑠璃天狗たちが、文楽を支えた時代は、既に終っているのである。戦後流行った「母もの」が、映画の世界から消えさって久しいが、文楽では未だにその興行感覚が生きて脈打っているのである。それだから現代の若者の心がつかめないのである。

ほとんど一生に一度しか観ない学生・生徒たちを、これが文楽なのか、と感動させるような公演を望みたい。

文楽をこよなく愛しているからこそである。　（土井）

文学遺跡めぐり

日　時　平成元年十月十二日(木)
行　程　飛鳥資料館―石舞台古墳―板蓋宮伝承地―飛鳥寺―甘橿丘―甘橿丘麓広場

平成元年度の文学遺跡めぐりは、萬葉のふるさと飛鳥見学として実施した。長堀駐車場を出たバスは十一時前に明日香村に到着。飛鳥資料館では折から法隆寺「飛天」の特別展が開かれていて、常設展では見られないものを見学することができた。石舞台へは初めて、との学生も思いのほか多く、その巨大さに目をみはったようだ。途中川原寺付近からは、バスの待つ所まで徒歩。しばし飛鳥路散策を楽しむ。板蓋宮伝承地では、大化の改新（六四五年）の舞台となった現地に立って感動をあらたにし、甘橿丘からは三山相闘の畝傍・耳成・香具を見やり、また眼下にひろがる飛鳥古京の地に萬葉の昔を想った。なごりの「明日香風」を背に受けながら、三時三十分、甘橿丘麓広場を出発して再びバスで帰路につく。人数が多くて説明が十分に聞きとれなかったとのレポートもあったので、実施方法を検討せねばならないが、今回は、教室での講義やビデオ学習、当日の車中及び現地での解説によって臨地学習の成果をあげえたものと思われる。（北谷）

国文学講演会

日　時　平成元年十一月八日(水)
　　第五時限から第六時限まで
対　象　国文学科一、二年全員
場　所　南港学舎講堂
講　師　随筆作家　岡部伊都子先生
講演題目　「こころ言の葉」

平成元年度国文学講演会は、相愛出身という本学に大変縁の深い、また著名な随筆作家でいらっしゃる岡部伊都子先生をお迎えして行われた。

岡部先生のお話には全てに魅了されるものがあったが、なかでもお母様への信頼、敬愛の念には心うたれた。蓮如上人白骨の御文―『朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり』の如く、私達は朝起きてまだ生きていると安心できる、しかし次の瞬間、別れを告げずにこの世のものではなくなってしまう無常。ありがとうの一言をも伝えられなかったお母様との最期の別れ。また、「私はただ母がすきだった。阿弥陀さんよりも親鸞さんよりも、母がすきでしたから、母がすきなことはしようと思いました。……母を喜ばせたかった」

と話された時には胸をあつくしたのは私だけではなかったであろう。心に近いことばであった。

さらに、どんな人でも、まずは生活者である、という。「生活」とは「生き、活かすこと」であり、生きている自分を、何事につけても骨惜しみせず、活かす工夫が日常生活を輝かしいものとする秘訣である。近代化が急速に進む今の世の中では、すべての物事の真の姿が見えにくくなってきている。これは、真実を探そうとする者の目測が誤っているのか、それとも真実を提供しようする者が真偽を正確に判断できていないのかは理解に苦しむが、心に近いことばを話すことで、こころが語れる。当然のことではあるが、ことばを持つ私達人間にとって一番大切なことは、ことばを利用してこころを語ることである。こころのないことばは何の効力も持たないし、虚しいものである。

先生の鋭い感性には終始圧倒されながらも、吸い込まれていくような魅力があった。学生達も、この貴重な御講話を将来への心の糧として、生き、活かしていくことであろう。

（川崎）

以上の他に、国文学研究室に関する行事として、和歌文学会関西例会の会場校をお引き受けし、七月八日(土)に次によう な要領で催された。第四十回というふしめの会を本学にて開らけたことは光栄なことであった。

和歌文学会第四十回関西例会

一　日　時　七月八日(土)午後二時から午後七時まで

一　場　所　相愛女子短期大学　短大棟

四二五教室(発表会場)

四二二教室(休　憩　室)

四二一教室(委員会室)

食　堂(懇親会場)

一　研究発表

1　『和歌童蒙抄』における「古詩」について

甲南女子大学大学院　田中　幹子氏

2　茂吉短歌の俳句性―誓子と茂吉―

光華女子大学教授　神谷かをる氏

3　『紀路歌枕抄』について―地方史研究における歌枕の問題―　帝塚山学院短期大学教授　鶴崎　裕雄氏

なお、図書館一階貴重書展示室において春曙文庫（故田中重太郎博士旧蔵清少納言枕冊子関係）を中心とし、藤井高尚の著作などを加えた展観（当日午前十時から午後四時

三十分まで)。

もうひとつ、「日本文学の点描」のいうテーマで、大阪市大学開放講座、相愛大学・相愛女子短期大学市民教養講座が、相愛学園本町学舎を会場に十月二十一日から十二月九日まで、毎土曜日(全八回、午後二時〜午後四時)行なわれた。主催は本学と大阪市教育委員会である。短大国文学科の教員ならびに人文学部の教員が講師となった。プログラムは次のようであった。

プログラム

1	10／21	長屋王―人と作品―	相愛女子短期大学助教授 北谷幸册
2	10／28	西行の和歌	相愛女子短期大学助教授 鈴木徳男
3	11／4	清少納言の生涯と伝説	相愛女子短期大学教授 柿谷雄三
4	11／11	平安女流文学と仏教	相愛女子短期大学教授 池田勇
5	11／18	良寛さんと芭蕉	相愛大学教授 藤木英雄
6	11／25	宣長と大坂	相愛大学専任講師 千葉真也
7	12／2	志賀直哉「城崎にて」について	相愛女子短期大学教授 中野恵海
8	12／9	晶子・啄木・俳万智	相愛大学助教授 木股知史

平成元年度　国文学科講義題目

文学概論　小林豊

国文学概論　鈴木弘道

国文学史Ⅰ　槇野廣造

国文学史Ⅱ　中野恵海

　　池川敬司

　　土井順一

　　鶴崎裕雄

国文学講読

萬葉集　北谷幸册

枕冊子　池田勇

平家物語　鈴木徳男

蕪村の俳諧　安藤武彦

近代小説―明治・大正の小説を読む―　上田博

近代小説―逍遙から太宰まで―　森崎光子

三島由紀夫・小林秀雄　田中敏生

国文学演習

源氏物語と紫式部　柿谷雄三

源氏物語　槇野廣造

新古今和歌集　鈴木徳男

新古今和歌集　福本良二